ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉　黒き帝王

天狗　鞍馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉　黒き帝王

【Ｎコード】
Ｎ１３８３Ｖ

【作者名】
天狗　鞍馬

【あらすじ】
女にしか使えないパワードスーツＩＳ。それを使うことができその中の一機「白式」を操縦する男子、織斑一夏。その幼馴染でありＩＳ「紅椿」を操縦する篠ノ之箒。彼らにはもう一人「黒」を操る幼馴染がいた――。
ＩＳ＋ゴットイーターのオリものです。（作者には文才がありません）
初っ端からキャラ崩壊ありです。

他の小説と比べてオリ主がザコです。
でも読んでくれると嬉しいです。

プロローグ（前書き）

初めまして、天狗鞍馬です。
この物語は本編の約６ケ月前の部分からのスタートになってます。
駄文ではありますが、お楽しみいただけたら幸いです。

プロローグ

「・・・」
眠い。半端なく眠い。
俺――水無月蒼也はベットの中で睡魔と格闘を繰り広げて――どうにか打ち勝った。
「・・・次の日が休みだからって夜更かしして空飛ぶんじゃなかった。」
０時過ぎてから寝ると起きるとき凄い眠いんだよな。俺だけかな？
「えーと、時間は――」
枕元に置いてある目覚まし時計を手に取り時間を確認しようとして――目を疑った。
「は？」
いきなり間抜けな声をだすな、と言われそうだが仕方ないだろう。だって、手に取ったのが目覚まし時計じゃなくって――
映画やドラマなんかに出てきそうな爆弾なんだから。
付け足すと、タイマーが『ピッ、ピッ』と音が鳴らしていて、ランプ点滅を繰り返している。その隣には色とりどりのケーブルが繋がれていた。ちなみにタイマーには
『００：００：０３：４７』
と表示され――って、はぁ！？
「ふざけんなぁ――！」
軽く泣きながら部屋から飛び出した。冗談だろう、と思いたいところだが残念ながら俺にかかる不幸は必ずガチでくるんだよなぁ。しかも毎度死にそうになるし。神様、俺が何をしたって言うんだ・・・って夜更かししたか。２時くらいまで。
・・・・・。

「わりにあわねぇ――――」
とりあえず不幸は後で嘆くとして、急いで外に出たほうがいいな。
家も結構大事だが命には代えられん。・・・親父たちには悪いけれど。
「よしっ」
どうにか外に出られたな。これでどうにか爆死だけは『ピッ、ピッ』――え？
・・・どうやら俺は相当なバカだったらしい。
爆弾、部屋に置いてこないで持ってきちまった。
くそ、残り時間は・・・後1分21秒か。裏庭に捨てて家を盾にすればどうにかなるか・・・？
「・・・やるしかないか」
どのみちもう時間は無い。
（行く『ピピピピピピピピピピピピピピピ・・・・』――はぁ！？）
覚悟を決めたら、タイマーのカウントが早くなりやがった！何なんだよ、このタイマー！てか本当にタイマーか、これ！？物欲センサーみたいのがついてるんじゃないのか！？
『ピピピピピピピピピピピピピ・・・』
うわ、まずい！10秒きった！
「ええい！」
爆弾を放り投げて全速力で逃げ出した。が。
『ピピピピピピ――――――！』
たいした距離もとれず、無情にもタイムアップを告げられた。
「っ！」
反射的に爆発の衝撃に耐えようと身構えた。そして今までの思いでが走馬灯のようにかけていく。
（父さん、母さん、先立つ不孝をお許しください・・・。一夏、どうか箒の思いに気付いてやって――）

両親、そして二人の幼馴染を思いながら、やがてやってくるであろう爆発に備えた。

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

「・・・何をやっとるんだ、お前は」

「ふぇ？」

横合いからかけられた声に思わず振り返るとそこには――

「千冬さん？」

そう、俺の幼馴染で同門の織斑一夏の姉である、織斑千冬さんが立っていた。美人でスタイルも良いのだが狼を思わせる鋭い吊り目のせいで『キレイ』よりも『カッコいい』という感想が先に来る。俺的にだが。――じゃなくて！

「べ、弁明させてください！お願いします！」

これは俺だけが悪いわけじゃない！

「いや、それはどうでもいい」

「ええ！？」

あっさり斬り捨てられた！？

「私が提案した計画だったからな。改変されたみたいだが」

「ええ――――――――――！？」

何で千冬さんがそんなことを！？まあとりあえず爆弾は偽物だったようで安心した。・・・今回本気で死ぬかと思ったけど。てあれ？改変されたみたい？みたいってことは・・・誰かもう一人いるのか？まあ、あの人だとは思うけど。

「あっはっは！引っかかったね、そー君！」

いた！やっぱりいた！

篠ノ之束さん――俺のもう一人の幼馴染、篠ノ之箒の姉で千冬さんの親友。自称一日を三十五時間生きる女。飛行可能なパワードスーツ、『インフィニット・ストラトス』―通称ＩＳの生みの親でもある。女性にしか使えないという特性があるため、俺には使えない。本当ならば

「束さん！」

「やー、そー君相変わらずダメダメだ「何してんだ――――！」ぶへっ」

いきなりで悪いがアイアンクローをかまさせていただいた。

「な・に・し・き・た・ん・で・す・かっ！」

「ぐぬぬ・・・なかなか容赦のないアイアンクローだねっ！」

あっさり脱出された。・・・畜生。

「いや、お二人とも本当に何しにきたんですか？」

「簡単に言うと勧誘だな」

「？千冬さんどこかの企業に勤めてるんですか？」

「いや違うよ。Ｉｓ関連ではあるけどね。ちなみにご両親にはもう許可を得ているよー」

束さんが代わりに答えた。真実らしく千冬さんはうなずいて肯定した。

「・・・根回ししてるんだったら断れないじゃないですか」

断ったら最後、アメリカにいるはずの父さんがいきなり現れて「この軟弱もの！」といってドロップキックを食らわされるだろう。母さんは精神的に攻めるもの用意しているだろう。Ｓだし。

「では、端的に言おう。水無月――」

「はい」

「お前、Ｉｓ学園に入学しろ」

・・・・・・・・

「えええええええええ！？」

設定

○主人公
水無月（みなづき）　蒼也（そうや）

○性別
男

○容姿
少し長めの黒髪に青味のかかった目をしている。身長は１６０？ほど。

○備考
慎重な性格でツッコミ体質。一夏、箒の幼馴染で苦労人。不孝体質でもあり、車に轢かれそうになったり、ヤクザの抗争に巻き込まれるなどは日常茶飯時に起こるが、千冬と箒に鍛えられ、どうにか平凡に生きてきた。束が捨てた失敗作のＩＳコアをいじっていたら正規のコアと同レベルのコア完成させたことから束に気に入られている。蒼也が使うＩＳにはこのコアが使われている。実は捨て子で養子であり、親との血の繋がりはない。少し心配しているのはいつまでたっても進展しない一夏と箒の関係。二人より身長が低いためどうしても子ども扱いされる。

○専用ＩＳ
機体名　黒暗天
製作者　篠ノ之束
背中に黄金の天輪を持つ黒塗りの機体。滑らかな部分が多いので着物のようにも見えでしまう。束が面白がって改造し腕部と脚部に

展開装甲が取り付けられたため分類上、第四世代機に入る。異質な形で完成したコアのためか、アビリティーを使うと出力がときたま不安定になる。
　装備は全て蒼也が出したアイディアから束が作り出した。束から装備を受け取った時装備名が意味不明な物ばかりだったので蒼也が付け替えている。

○ワンオフ・アビリティー
　終末捕喰
機体に触れているエネルギーを発生するものからエネルギーを吸収することができ、取り込んだエネルギーの本来の使い道を再現することができるが、別のＩＳからは吸収できない。

○装備
・ヘラ
黒塗りな二丁のガトリング。弾丸が矢じり状になっている。グリップの方向転換が可能で、状況に応じて打撃武器としても使える。
・ポセイドン
四機のビット兵器。弾丸は自動追尾ミサイル。一機一機にシールドが取り付けられているので盾としても扱える。
・ゼウス
突撃槍。追尾性は無いが、先端を打ち出すことができる。
・ラーヴァナ
ショットガン。連射性がとても高いがその分威力が低い。
・ノヴァ
広域殲滅型レーザー兵器。

○第二形態　天照（あまてらす）
　背にあった天輪が九つに増え、全身装甲（フルスキン）になる。天輪からは高エネルギー波を打ち出す事ができ、それを使っての急加速が可能にな

っている。膨大なエネルギーを貯蓄できるが、天輪の使用中はアビリティが使えなくなる。

○追加装備

・水天日光天照矢野鎮石　（すいてんにっこうあまてらすやのしずいし）

鏡型のシールド。エネルギーの吸収が可能で吸収したエネルギーを別の機体に譲渡することができる。

・彼岸花殺生石　（ひがんばなせっしょうせき）

鎬のある黒塗りの刀。エネルギーを纏わせることができ遠距離攻撃が可能。

クラスメイトはほとんど女（前書き）

入学までの６ヶ月間を書こうかと思いましたが、そのまま本編第１巻に入ってしまいました。・・・ダメだな自分。

クラスメイトはほとんど女

「・・・きついな、これは」
それがようやく俺（水無月蒼也）の口から小声で出せたセリフだった。
今日は高校の入学式。新しい生活の初日。喜ぶべき一日だと思うんだが・・・。
（なんで睨まれてるんだっけ？）
そう、なぜか隣に座っている――いや、隣だけじゃない。クラスメイトほぼ全員に睨まれている。まだ悪印象を持たせるようなことはしてない筈だが・・・。一夏と箒が同じクラスだから緊張感はあまりないけど、なんか苦手だなこの空気。
（俺、なんかやったかなぁ？）

千冬さんと束さんが起こしたハプニングから約６ヶ月。俺は公立ＩＳ学園に入学していた。ちなみにあれは試験を兼ねていたらしく後々不合格を付けられ、俺はＩＳ学園で教官と戦闘させられた。束さんがいた理由は俺の専用機―『黒暗天』のグレードアップのためだった、らしい。らしいというのは束さんに「もう終わってるよ♪」と告げられたからだ（電話帳と見違える分厚さの参考書を千冬さんから渡された後、二人で速攻で去って行った）。以前と外見がさほど変わってなかったのでどうグレードアップしたのかわからないが、変な事にはなってないだろう・・・多分。
でもって勉強やら手続やらで早６ヶ月が過ぎて、現状に至るというわけだな、うん。
後、日本の代表候補生として俺と黒暗天は正式に国に登録された。
まぁ、これについてはどうでもいいが。

（いやーにしても箒とは６年、一夏とは３年ぶりの再会だ。近いう

ちに御馳走作ろう。）

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲ（ショートホームルーム）はじめますよー」
おっと、ぼけっとし過ぎたな。
「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」
そう言ったのはこのクラスの副担任こと山田麻真耶（やまだまや）先生。担任は千冬さんらしいが、会議があるらしくまだ来ていない。
普通ならここで反応があるはずなのだが・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

教室の中は妙な緊張感に包まれていて、誰も反応を返さない。
「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」
誰も反応しなかったせいか、山田先生はちょっとうろたえていた。
妙な空気のまま自己紹介が始まる。一夏はこの空気に耐えられないのか、しきりに窓側の席にいる箒に何らかの救いを求めて視線を送っているが顔ごと視線を逸らされていた。
「織斑くんっ。織斑一夏くんっ！」
「は、はい！？」
いきなり声をかけられたためか、一夏は動揺して声が裏返った状態で返事をした。案の定くすくすと笑い声が聞こえて一夏はさらに狼狽、山田先生は怒ったのかと勘違いし、しきりに頭を下げて一夏になだめられていた。

「えー…えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」
しきり直して一夏が立ち上がって自己紹介をした、がそれでは満足しなかったらしい。『もっと色々喋ってよ』という感じの視線が一夏に突き刺さっていた。
「・・・以上です」
がたたっ、と思わずずっこけた女子が数名いたようだ。何か言えば

よかったのかもしれないが、この状況では少し難しいだろう。
（あっ、千冬さんだ。ってなんで音もなく一夏の背後に回って出席簿をかまえてるんだ？）

パァン！
うわ、痛そー。今、角でいったぞ・・・。

「げぇっ、関羽！？」
「いや、違うだろ」
バシンバシン！
「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」
ぉ、おぉぅ。ツッコミしたせいか俺も殴られた。軽く理不尽な気がしないでもないが、まぁ置いといて自己紹介の続きに耳を傾けよう。

その後千冬さんの自己紹介時、ファンの人達（３０人中２０人くらい）による絶叫で鼓膜が破れそうになったり、出席簿アタック（一夏命名）を食らいながらも無事にＳＨＲは終了した。

男はつらいよ（前書き）

本編第二話です。
セシリア登場話ですがうまっいったかなぁ・・・？

男はつらいよ

二時間目が終わって現在二度目の休み時間。

「・・・・うぁあ」

一夏が死にかけていた。どうやら専門用語の嵐と大量に突き刺さる女子の視線で大ダメージを受けたらしい。ちなみにさっきの声はうめき声で、あれが五回目だ。・・・文面じゃわからないと思うが凄い気持ち悪い。

「・・・・うぁあ」

きもっ！めっちゃ気持ち悪いぞ一夏！しょうがない、復活の呪文を唱えてやるか。気持ち悪いし。こんなんでも一応幼馴染だし。

「・・・言い残した事はあるかー」

「・・・実は、結構寂しがり屋です。　なわけあるか！」

はい、復活成功。ＨＰは一桁だろうけど。

「とりあえず久ぶり。３年ぶり・・・いや、２年と半年ぶりだな一夏」

「おう、久しぶり。それよりびっくりしたぞ！学園に来たらお前と会うなんて思ってもみなかったし。いつ来る事が決まったんだ？というかＩＳ動かせたのか？」

「６ヶ月程前に千冬さんが来てな。その時に決まった。ＩＳもちゃんと動かせるしな」

「そうだったのか。てか千冬姉にも驚いたな。ここの教師だなんて

こと全然聞いてなかったし」
「そういう事話さないもんな、千冬さん」
「・・・ちょっといいか」
「え？」「ん？」

声をかけてきたのは自己紹介の時、一夏の助けを無視した俺の二人目の幼馴染の箒だった。昔からのトレードマークであるポニーテールがなびいていてちょっとカッコいい。ちなみに教室の外にはめちゃくちゃ人が集まっていて、箒が話しかけてきたあたりで「先越された！」「落ち着いて。まだ、まだ一日目だから」とか聞こえた。

「久しぶりだな、一夏、蒼也」
「おう、久しぶり」
「久しぶり、箒。６年ぶりかな？」
「そうだな・・・長かったはずなのに結構短く感じられる」

そう言いながら、箒は昔のように俺の頭を撫でてきた。この歳になってまで子供扱いされるのは納得いかないが、久しぶりだからまぁいいや。心地良いし、今日は好きにさせよう。一夏も撫でてこようとしてきたがその手は払っといた。残念そうな顔をしていたが、それは無視。

「そういえば箒、去年剣道の全国大会で優勝したよな。おめでとう」
「な、なんで知ってるんだ」
「新聞で見たんだが」
「な、なんで新聞なんかみてるんだっ」
箒の顔が赤くなる。やっぱ嬉しいんだろうな。てか、それは初耳だぞ？
「そうだったのか？なら赤飯炊いてお祝いしなきゃだな」
「去年のことだし、別にいい」

「むう、じゃあ今度代わりに再開パーティをしよう。飯は俺が作る」
「「！」」
「ほ、本当か！？」
「二言は無いな？無いよな！？」
「・・・それは、食いたくないという意思表示か？」

「・・・ちょっとよろしくて？」
「「？」」
「あ、セシリア」

漫才風味になっていた会話を止めたのは、イギリス代表候補生セシリア・オルコット。第三世代型である中距離射撃型ＩＳ『ブルー・ティアーズ』の操縦者だ。俺の？のルームメイトでもある。さすがに初めて会ったときは口論や罵倒、果てにはＩＳでの模擬戦などに発展したが、数週間後にはお互いを名前で呼び合える仲になっていた。

「あの、その・・・・」

？珍しく口ごもってるな。どうかしたのか？
キーンコーンカーンコーン

「あっ・・・」
「急ぎの話か？」
「い、いえ。違います。違いますけど・・・」
「じゃあ後で必ず聞くよ。ちょっと気になるし」
「・・・はい。では・・・」

それだけ言うとセシリアは自分の席に戻って行った。その後ろ姿が少しだけ寂しそうに見えた。

？

「それではこの時間では実践で使用する各種装備の特性について説明する」

今回の授業では山田先生に変わり、千冬さんが教壇に立っていた。それなりに重要なことだからか山田先生もノートを手にとっていた。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めなきゃいけないな」

ふと、思い出したように千冬さんが言った。

代表者とはまんまの意味で、クラス対抗戦をはじめ、生徒会の開く会議や委員会への出席などの仕事を受け持つ、委員長のような存在だ。千冬さんの事だから「自薦他薦は問わん」と言って一夏に投票が集中するだろうから、俺には然程関係ない。しかしなぜだろう、少し嫌な予感がするぜ。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

「わたしも！」

まあ、予想通り。何もないとは思うが、一応自衛をしといたほうがいいな。

「自分は、オルコットさんを推薦します」

「！？」

「では候補者は織斑とオルコット・・・他にはいないのか？自薦他

薦は問わないぞ」

ん？一夏アイコンタクトで何かを伝えてきた。何々・・・？

（裏切ったな）

たまに鋭いなこいつ。

（そんなこたぁねぇよ？）

（・・・こっちにも考えってものがあるが？）

（何を言っている？それは逆恨みってもんじゃないか？）

（うるさい！屁理屈こねるな！）

（お前だよそりゃ！）

（くらえ！俺の反撃！）

（聞けよ！会話のキャッチボールくらい成り立たせろよ！）

「先生、俺は蒼也を推薦します！」

「わ、わたくしも！」

っておい、考えって、反撃ってそんなんかよ！ただ推薦しただけじゃん！てかセシリアもなにまざってんの！？

「ふむ、では今名の上がった3人に順次模擬戦をしてもらいその結果で決定しよう。勝負は一週間後の月曜。第三アリーナで行う。織斑とオルコット、水無月はそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

ぱんっと手を打って千冬さんが話を締めた。くそぅ一夏め、一週間後まで覚えていろよ・・・！

この思いは（前書き）

前回から一日たったところからスタートです。
次回で代表決定戦。でも他の人の作品を見ると基本５，６話あたりでセシリア戦に・・・。もしかして少なすぎ？

・・・とりあえず、このままいっちゃえ！そんなこんなで始まり始まり～

この思いは

～放課後・第三アリーナ～

「んー、何か上手くいかないな」

俺（水無月）は突撃槍（ランス）を使っての練習をしていたのだがなかなか上手くいかない。機体は真っ直ぐなのだが、槍がどうしても少しぶれるのが直らない。狙った部位に当てれないとちゃんとしたダメージも臨めないので、結構問題だ。もう少し練習したいが・・・。

「そろそろ6時か・・・」

今日はハンバーグの予定だから、もう戻って準備しないと飯時から外れることになる。それは避けたいのだが、練習はしたい。さてどうするか・・・。

『蒼也さん』

考えていたら、プライベート・チャネルが送られてきた。相手はセシリアだった。

『リア？何かあった？』

『お、お話ししたいことがあるのですが・・・よろしいですか？』

『んーと、今どこ？アリーナじゃないみたいだけど』

『寮の自室ですわ』

『じゃあいったん戻るよ。ご飯作らなきゃいけないし』

『わかりましたわ。お待ちしています』

『じゃあ後でね』

ピットに戻りながら通信を切る。ちなみに「リア」というのは俺が作ったセシリアの愛称。気に入ってはくれたが何故か二人きりの時だけという制約がついた。なんでだ？

（話し、か）

プライベート・チャネルを使ってきた辺り、誰にも聞いてほしくない大事な話なんだろう。

（なるべく早く戻ろうか）

そう思いながらアリーナを出た。

寮に戻ると、セシリアがお茶を淹れて待っていてくれた。俺は礼を言ってそれを受け取り、口に含む。時間をおいていたからか、お茶は程よい熱さで心を落ち着かせてくれた。

「・・・で、話って何？」

本題を切り出してみたがセシリアが口ごもる。相当言いづらいことらしい。

「言いづらいなら無理して言わなくても・・・」

「いえ、言いますわ。蒼也さん」

真っ直ぐに真剣な瞳で見つめられる。そして――

「篠ノ之さんとはどんな関係なんですの・・・？」

思考が停止した。頭がショートしかけたが、爆弾発言みたいなのが飛んできたのはわかった。篠ノ之さんって箒のことだよな・・・？

「・・・それってどういう意味？」

「言葉の通りです。どんな関係ですの？」
「んーと、幼馴染で同門。残念ながら恋人とかそんなんではない」
求められている回答とは違うかもしれないが、正直に答えた。本当にこれが俺と箒の関係だ。――昔に俺が彼女にどんな感情を抱いていたとしても。

「そっそうですの。・・・よかった」
「？なんか言った？」
「い、いえ。何もいってませんわ」
「・・・？まぁいいや。とりあえず飯作るね。今日はハンバーグだよ～」

話を逸らすように簡易キッチンに足を運ぶ。これ以上このことに関して追求されると結構困る。

（昔は昔、今は今ってことにしたいんだがな。）

そう思いながら食事の準備を始めた。

――――約６年前、俺は箒に惚れていた。そばにいられるだけで心が躍った。
が、あっさりとその思いは夢想になった。
まあ、告白しようとしたその日に意中の子から『好きな人ができた』と言われていろいろ相談されるなんてどんな世界でもよくあることだろう。
――その相手がよく知ってる奴で
――俺にとっても大事に奴だったなんてこともよくあることだろう
そんなこんなで俺の初恋は実らず終わる。

当たり前と言えば当たり前だな。だって――

――バケモノでヒトゴロシな奴に惚れる人がいるわけないもの

昔の夢を見た。一番忘れておきたかった、最悪な記憶。
始まりはいつも食事の場面から始まる。皿に乗っているのは――だ。それを手に取ってむしゃむしゃ食べる。明らかに歯では噛み砕けない筈のそれを、最高級の食材のようにほおばって食べている。この時点でもう吐き気がするのだが夢の中の俺は、気にせず食事を続ける。そして脳の中に何かが浮かび始めた。今食べていた――の情報だ。
もとは何から構成されているのか、何をする為のものか、どうやって使用するのか、どうやって生成するのか、それだけが持つ特性はなにか。知りたくもない事をどんどん解析していく。
やがて、大きな影が自分と同じくらいの「何か」を持ってきた袋に入っているがもう中身は解っている。・・・人間、それも子供。組織の人間が攫ってきた子だろう。
そして声が降りかかった。

「お前の力を見せてくれ４９号。出来損ない共とは違うお前の力を」
言われるがままに俺は手をかざす。その手には先程食べつくした――が握られていた。
構えをとる。目を逸らしたい、でもそらすことができない。

この日はこれで5人目。この後もう4人ほど処理する《・・・・》
明日は8人
明後日は１１人
明々後日は9人
合計が１００を超えたのはいつだったろう？
１０００を超えたのはいつだったろうか？

「・・・やだ」

幼い声が聞こえた。袋の中からのものだろうか。

「・・・やだ、やだよ」

それとも――昔の俺の声だろうか。

いつもなら、ここで最悪の展開になる。

だが今日はいつもと違うらしい。

俺の手に持っていた――が消えたからだ。
正確にはレーザーが――を撃ち落とした。

レーザーが飛んできた方向を見る。そこには一人の女性がいた。長大な銃と蒼い装甲を持った女性。
その人はすぐに構え直し、大きな影達を撃ち抜いた。撃ちぬかれた影達は、跡形も残らず消えていく。
女性がこちらを見る。
俺はどこかで絶対見たことのあるはずの顔なのに逆光のせいで誰だか全く分からない。

だがそれでもみえたのは

とても綺麗な微笑みだった。

朝起きたら、セシリアに抱きしめられていて一悶着おきた。

この思いは（後書き）

質問、感想、アドバイスがあれば送ってくれるとありがたいです。

では、次回の投稿で。

クラス代表決定戦　～「白」対「黒」～（前書き）

他の方の小説を見てると自分の書いてる文の三倍近くは文字数の差が・・・。

しかも今回は戦闘シーン・・・上手くいくかなぁ。

まあいいや！今回も、スターート！

クラス代表決定戦　～「白」対「黒」～

入学式より一週間後の月曜。第三アリーナＢピット。
俺は自身の専用機『黒暗天』の最終調整をしていた。Ａピットには一夏が控えているが、専用機がまだ届いてないそうで俺は待ちぼうけをくらってしまい、ただ待つのは時間の無駄なのでこうして調整をして待っていた。
ちなみに対戦相手の選出はくじで行い、一夏が俺と同じ番号を引き当てた。セシリアは明日に勝者と戦い、合計勝ち数が多い者が好きなポジションを得ることができるというものだった。
ついでここには俺一人、箒は一夏のほうに行っている。当たり前と言えばそうだが、少し寂しい。ちょっと激励みたいのは欲しかったなぁ・・・。

ワアアアッ！と会場が沸いた。一夏が専用機を纏ってステージに躍り出たらしい。それじゃあ・・・。

「俺も、いや俺らも行くか・・・。喰らうぞ、黒暗天」

ＩＳを起動させると、全身が光に包まれＩＳアーマーが構成される。同時にＰＩＣ（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）による浮遊感、パワーアシストによる力の充満感とで全身、いや世界の感覚が変わる。
そのまま設置してあるカタパルトに足を固定。さぁて・・・。

「楽しみだ」

かつての同門、倒すべき宿敵が待つ戦場へと足を踏み入れた。
ステージに出た瞬間、ものすごい歓声が響いた。試合を見に来ている生徒達によるものだろうがやかましくてたまらない。だが、それ

を簡単に許せるほど物凄い高揚感に俺は襲われていた。
目の前にいる一夏も同じようで、浮き足立っているような状態だった。

「一夏、ちょっと聞いてもいいか？」
「？おう」
「お前もしかして、一次移行（ファースト・シフト）してない状態で戦う気か？ちゃんと初期化（ローマット）と最適化（フッティング）が終わるまで待つと言ったろ」
「千冬姉曰く、ぶっつけ本番でものにしろとさ。後、アリーナ使用時間もギリギリなんだと」
「おやまぁ。じゃあ、ちゃっちゃと終わらすか」

『3』

「言ってくれるな。なら三年でどこまで変わったか見てやるよ」

『2』

「ああ、そうさせてもらう。だがな一夏」

『1』

「いつまでも勝ちつづけられると思うなよ？」

『0、はじめ！』

「いくぞ！」
「蹴散らす！」

一夏は近接用ブレードを、俺は突撃槍『ゼウス』を構えて切りかか

った。

〜?〜箒サイド

「・・・すさまじいな」

箒のもらせた感想はこれだけだった。自分の二人の幼馴染の戦いは次第に火力を増していく。

箒と彼らは同門ではあるが、６年顔をあわせず離れていたため体の動きや実力が大きく変わっていた。　一夏の実力はこの一週間で確認でき、少し情けないものになっていた。なら蒼也は？

昔はとても虚ろな存在に見えた。目は死者のように焦点が合ってなく、声をかけても反応が全くなかった。それでも強かった。力任せに竹刀を振るうだけだが、腕力だけはとてもあり、本当に同い年かと疑ったくらいだ。だがそれでも一夏には勝てなかった。

しかし今、彼は一夏を圧倒していた。槍による正確な突撃は、確実に一夏の盲点を突き、エネルギーシールドを削っていく。その後の離脱も完璧だ。一夏が距離を詰めようとすれば左手に呼び出したショットガンで牽制をし、怯んだ所でまた突撃する。時たま４機のビット兵器による後方支援もあり近づくどころか遠ざかる。完全に逃げに撤させると武器を切り替えガトリングを取り出し、逃げ場を埋めるように弾幕の雨を降らせた。

昔の蒼也の戦い方が力押しな「剛」であったなら、今の蒼也は技を多用する「柔」だ。

どちらにも負けてほしくは無い。だが勝利を手にするのは一人だけ。

「・・・・・一夏、蒼也」

二人の無事を祈るかの様に、指を絡めて胸の前に持ってくる。その

時、状況が変わった。

〜?〜水無月サイド

「よく躱すな一夏。これが初戦とは信じられないぞ」

「そいつはどうも！」

俺は2門のガトリング『ヘラ』による砲撃で一夏を追い詰めていたが、思うようにダメージを与えられてない。だが今までの攻撃で、装甲の殆どが大破している。シールドエネルギーは残り２００と少しといったところだろう。後2，3撃ほど入れれば終わるだろう、なら。

「打ち抜きな、『ポセイドン』」

４機の物理シールド付きビット『ポセイドン』に指示を飛ばす。俺自身でも追っているが、ポセイドンの弾丸は追尾ミサイルなのでこちらの方が確実だ。

４発の追尾ミサイルが一夏を襲う。そして――

「う、うおおおおお！！」

爆発は容赦なく一夏を飲み込んだ。

クラス代表決定戦　～「白」対「黒」～（後書き）

すいません（作者魂の土下座）やっぱり短くなりました。しかも次話に通いてしまうなんて・・・！
ほんっとうにごめんなさい。

また次話は更新が遅れるかもしれません。
それではまた次話で。

クラス代表決定戦　～決着？～（前書き）

遂に有名なあの人登場！そして速攻退場！

嘘です（後ろの方はホントです。更新遅れて申し訳ありませんでした。）

クラス代表決定戦　～決着？～

～？～ｓｉｄｅ？？？

「あー、めんどくさ」

声の主の第一声は、廃ビルの中を駆け巡りながら目の前に対峙する2人の人物に焦りを、もう1人の人物に怒りを与えていた。彼らは年齢や国籍が一致していないが一つだけ共通しているモノがあった。それは右手につけられた腕輪、そしてもう一つ――――常人には持てない程長大な武器。

「・・・随分と余裕だね。この僕を前にしてそんなセリフが言えるなんて」

3人のうちの1人――エリック・デア＝フォーゲルヴァイデが口を開く。その行為に残りの2人は顔を青ざめた。

彼らの任務は「目標の撃破」ではなく、「目標の位置の詳細確認」及び、「目標の勧誘」である。

目標――目の前の少年は彼らの組織において敵にもなり、味方にもなる存在だ。「脅迫して仲間に加える」という選択肢も存在したろうが、3つの凶器を目の前にして物怖じせぬこの少年にそんなものが通用しないことは目に見えていた。

残ったのは「武力を使わず言葉によって説き伏せる」だがエリックの態度と行動によって成功する確率は絶望的な数値まで落ちていた。

そして彼らが彼の前から「無事に」去れる確率もまた、絶望的な数値である。

「誘いに来たってんなら答えはノーだ。いつ背中からぐっさり刺されるか分からんし、毎日俺たちを殺したがっているような奴らに手を貸す理由が無いしな」

「まさか、そんなわけないだろう？」

「ふぅーんまさかこの俺と殺しあう気か？お前らニンゲンごときが？」

「バケモノごときに後れを取るわけがないだろう？」

「ふぅん、なら・・・」

少年がぼろぼろのソファーから腰を上げる。その体からミサイルポットが出現して――

「１０秒は持てよ？」

――――大量のミサイルが少年の全身から放たれた。

「！？」

突然のことに驚きながらもエリックは回避行動をしながらミサイルを彼専用の武器で撃ち落とす。

「たいしたこｔ「エリック！上だ！」っ！？」

エリックは素早く上を見るが時すでに遅く――彼の意識はここで途切れた。

「6秒。赤点だな。」

エリック『だった』モノを踏みつけながら少年――強化試験体五十三号、個体名称『テスカトリポカ』はそう呟いく。

「さて――」

残った2人にテスカトリポカはエリックの武器――神機を投げつけこう続けた。

「殺るか去るか、好きな方選べ」

2人は、絶望的な数値から『生存』を掴み取れたようだった。

~?~side蒼也

「さて」

爆炎で姿が見えないがブザーが鳴らないってことは、あの一撃で一夏のシールドエネルギーが0にならなかったってことだよな・・・。運良く一次移行(ファーストシフト)したか・・・。

「・・・望むところだ」

そう呟き、武器を構え直そうとして――消えた。

「は？」

手に持っていたガトリングと近くに浮いていたビット４機が一斉に粒子となって消えていった。あわてて再コールするが何も起こらない。

混乱しているとこにこんなメッセージが出てきた。

――ＥＲＲＯＲ　原因不明の問題が発生しました。メッセージフォルダに未読のメッセージが存在します――

いや意味わからねぇよ！？つかメッセージは関係無いだろ！こんな事が起こるような事は何もなかったはず――あ、いや。

「・・・あった」

そうだ。あのウサ耳つけた大天災が一度黒暗天持っててるんだった。他の装備もコール不可と・・・どうしろと？

――ＥＲＲＯＲ　原因不明の問題が発生しました。メッセージフォルダに未読のメッセージが存在します――

「分かったよ。読みゃいいんだろ読みゃ・・・」

ホントに何がしたいんだろあの人。えーと、何々・・・？

『いっくんと幼馴染対決になるだろうから一イベント入れてみたよ！嬉しいかい？嬉しいよねぇ』

「今すぐ真っ二つにしたいんだけど」

っていうか、それ以外にもまずそうなことがありそうなんだが？

『何が起こるかはお楽しみ！５分間武装が使えなくなるから気を付けといて～☆あ、後それに加えてもう一イベントあるから頑張ってねぇ～』

「ふざけんなや！」

いや、改造したみたいなこと言ってたけどさ。言ってたけどこれは無いだろう・・・！処理は千冬さん（阿修羅）にやってもらうからいいとして。しかしこれはキツイぞ、おい。一応６年間ＩＳ動かしてきたけどさ、さすがにこのハンデはでかいとおｍ「ふぃんがああああああああああ！」ってはい？

俺の顔面に、某バイキン並みに綺麗な軌道で某アンパンのパンチ（右ストレート）が決まった。

「ぶるぁああああああ！？」

「アン〇ンチじゃない！ゴットフィンガーだ！」

「ただの右ストレートだったじゃねーか！」

戦闘していたはずがいつの間にやら漫才になってしまっていた。どうやら緊張というものはそこいらの犬に食われてしまったらしい。

「さあ、お前の罪を教えろ」

「お前いつライダーになりやがった！？」

やるんだったらセイバーの真似をしろ、剣持ってんだから。エクスカリバーとかガラティーンとかないけどさ。ちなみに俺は龍騎派だ。

「行くぞ、蒼也！今回も俺が勝つ！」

「上等だゴラァ！まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！」

何時までも黒星なのは御免なんだよ。あ、左手にぎにぎしてる。ラッキーだな、一夏の奴浮かれてやがる。

まぁ俺がやることは単純明快に2つ。1つは、『5分間攻撃を躱し、経過したら武装をコールし一撃叩き込む』

もう1つは『黒暗天を解除して別の（・・）ＩＳを展開する』

難度としては後者がメッチャ楽できる。が、束さんが何もしないとは思えない。

それに白式の装備である『雪片弐型』はなんかヤバそうだから一撃でも食らいたくはない。

「うおおおおお！」

「おっと」

上段からの振りかぶり、そこから繋ぎの袈裟切りを2度後ろに下がって躱す。

狙いがよくそして早いが、躱せない事は無い。

中段からの一線を、切り返しを、突きを、薙ぎを、放たれる『必殺』を躱し続ける。

――残り、3分26秒。

「くそっ、何で躱せるんだよ！？」

「んぁ？勘だが？後は経験だと思うがなにか？」

そういう経験をするときは大体銃だのドスだのが出てくるがな。たまにモーニングスターとかガトリング持ってきた奴もいたけど。

「経験って、そんなのどこで――」

「んーと、イタリアでマフィアと抗争したり、アメリカで麻薬密売組織とタイマンしたり、イギリスで銀行強盗叩きのめしたり、フランスで軍隊に追っかけられたり、日本で大小合わせて5～60の極

道不良ヤクザグループを警察に突き出したくらいかな」

「それ、くらいって言わないぞ！？」

しゃあないじゃん、逃げれないんだもん。

――残り1分19秒。

「後は・・・お前の動きを覚えてるから」

「は？」

「俺が何回お前と戦ったと思ってるんだ？お前の大体の動きや癖は覚えてるんだよ。だいいち、同門相手に『一閃二断の構え』を放つなんて、躱して首を刎ねてくださいと言ってるようなものだぞ」

親父だったら80、いや100回は刎ね飛ばされているだろう。

――残り43秒。

「で、でも昔は…」

「負けてたね。超あっさり。だが――」

――残り22秒

「――人は成長するものだ。いつまでも全く変わらないなんてこと、ありえないんだよ」

――残り17秒

俺は一夏から距離を取る。あのウサミミ大天災は存在からふざけまくっているが、やるべきことは十全に成し遂げる――そんな人だ。嫌いではないが、次会ったら顔面ぶん殴る、と心に決めて。

――残り14秒

「うぉおおおおおおおおおお！！！」

一夏が吼え、『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』による突撃をしかけてしてきたが、所詮はただの直線的な動きだ。左右に動くだけで躱せる。

――残り6秒

――残り5秒

――残り4秒

――残り3秒

――残り2秒

――残り1秒

「さあ――」

――全プログラムインストール完了。これより黒暗天第二形態、『天照』を起動します――

黒暗天が爆発的に輝き、その光が収縮する。光の放出が収まってい

くたび、新しく、そして力強くなった装甲が顔を出す。
新たな装甲は全身装甲らしく今まで装甲の無かった関節部分、首と腰回りに装甲が追加されていた。そして、背部には黒暗天の最大兵器『ノヴァ』が９つ浮遊している。
　そして追加された二つの兵器、黒塗りの刀――彼岸花殺生石と、鏡型の盾――水天日光天照矢野静石をそれぞれコールする。

「閉幕だ。派手にいこうや！」

『試合終了。勝者――水無月　蒼也』

・・・

・・・・・・

・・・・・・・・・はい？

多分今俺は全力で『なんで？』という顔をしていることだろう。アリーナの観客席にいるギャラリー達も同じ顔をしている。
ピットの方を見ると千冬さんが『やれやれ』といった顔をしていた。

何が起こったか分からないまま、超が付くほどしまらない勝ち方で試合が終了して。

結果――俺は勝った。

クラス代表決定戦　～決着？～（後書き）

・・・すいません。調子に乗りすぎました。

アドバイス、意見などがありましたらお願いします。

badlack scarecrow

「・・・はぁー」

あの後、俺はただ一人寂しく寮に帰る道を歩いていた。何故か？千冬さん、箒といった俺の知り合いはみんな一夏の方に行っているからだ。後セシリアは公平をきすため自室待機だそうな。それにしても・・・・。

「・・・なんだかなぁ・・・」

思わずため息を付いてしまう。さっきの試合の結果、俺は勝った。勝ちはしたけど、自分の力で倒したのではなく、一夏の自爆による勝利だ。

要するに、ぶちのめせなかったので不完全燃焼なのである。

「・・・まぁ、いいか」

今気にするべきは、どっちかっていうと後ろだろう。

何かさっきからつけられてるし。殺気出しまくりで。

しかも1人じゃなくて30人くらい。

「・・・あれぇ？」

俺なんかしたっけ・・・？

『ＩＳ操縦できる男子だから拉致してやるぜヒャッハ――』というイカレタおっさんどもでもないだろうしなぁ。

「んー」

俺は傾げるように首を右側に逸らした。

――――刹那。首のあった位置を何かが駆け抜け、道に敷き詰められていた敷石を壊した。

「おやまぁ、血気盛んなことで」

敷石を壊した『何か』を引き抜く――弾丸だ。何処の物か知らんけど。

・・・これぐらいなら躱さなくてもよかったな。

とりあえず、飛んできた方向にデコピンで撃ちこんどいた。

・・・なにも反応がない。

「外したか？ま、いっか」

帰ろ、と踵を返したところで体に何かがぶち当たり――――爆発を起こした。

とりあえず、今日分かったことは『ＩＳ学園の警備はザルだ』というとこだろう。

〜？〜

爆発を起こした地点から数百メートル離れた森の中、その一団は任務を成功したと依頼主に報告していた。依頼内容は、『目標の人物の誘拐、または――――抹消』

目標は、織斑一夏と水無月蒼也。ＩＳ操縦者ではあるが、つい最近まで戦闘経験が無い一般人だ。誰もが楽だろうと高を括っていた。

目標の一人、織斑一夏はほぼ常に誰かが傍にいるので、強行できなかった。だが、一人になる時間はそれなりにある。しかしもう一人の水無月蒼也の方がたった一人でいることが多い。

男達は先に水無月蒼也を、その後織斑一夏を誘拐しようとした。

が、雲行きが怪しくなった。

水無月蒼也は明らかに尾行に感づいていた。睡眠弾を躱し、あまつさえ正確にこちらに撃ち返してきた。撃ち返されたそれは、男達の一人の頭に当たり、貫通して絶命させ、肉片を飛び散らさせた。

「――――――――――――」

男達の次の行動は早かった。即座にロケットランチャーを構え、照準し、放った。

弾は少年に当たり、爆発を起こし少年を飲み込んだ。それを確認し、依頼主に報告。次の標的――――織斑一夏を誘拐しようとしたところで1人が倒れた。

どうした、と声をかけるより早く男達の顔に何かが付いた。

血が付いていた。
男達が驚愕するよりも早く、別の男が倒れた。
次々と
次々と次々と
次々と次々と次々と
血を吹き出し、バラバラになって倒れていく。
そして立っている男はたった1人になった。
そして
「こんばんはー」
自分たちが狙っていた目標の一人が、殺したはずの少年が立っていた。
そして右腕から巨大な口が広がっていた。
男は右手に持っていた銃を構えることができなかった。
恐怖によって———

――――ではなく声をかけられた時点で右腕が切り落とされていた。

――――逃げよう――――そう思った瞬間両足が動かなくなった。

見ると、両足が無くなっていた。

ついでに左腕も無くなっていた。

「でもって」

少年は男に狙いを定め――――

「いただきます」

――全開まで開かれた咢が、男を飲み込んだ。

〜?〜

「・・・あ」

ぐちゃぐちゃと音を立てながら食事をした後、少年はあることに気が付いた。

「死体の処理忘れてたや」

面倒くせー、とぼやきながらも男達の持っていた武器を壊し、死体と一緒に地面に埋めていく。

全て埋め終えてから少年はポケットからケータイを取り出し時間を確認した。

午後7時28分デジタル標記されていた。

少年はため息を付いて

「学食行くか・・・あ、リアにメール送っとかないと」

ケータイをいじりながらその場を去っていった。

その場を見ていた人物がいるとも知らずに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1383v/

ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉　黒き帝王

2011年11月19日21時38分発行